

北海道十勝農村における 集落組織再編と集落自治の形成

——集落の情報伝達機能に注目して——

玉井康之

本報告は、北海道十勝農業の現局面の課題を踏まえて、現段階の北海道集落に求められる新たな機能を明らかにすることを課題とする。事例として小人数集落が結合して集落組織再編を行った鹿追町・更別村の集落を取り上げ、とりわけ再編の制度的な変遷とその過程での農家の集落運営への関わり方を分析の中心に置き、北海道集落の新たな機能と在り方を明らかにしていきたい。

北海道の農業も、七〇年代には、都府県と同様に機械利用集団が展開し、生産性向上のためにも個別経営の発展のためにも作物ごとの部会や生産組織等の機能集団の発展が組織化の重要な要因として強調された。しかしながら個々の経営の自立的な北海道においても、これら機能集団の健全な再編・発展や、土地の集団的利用を含めた異質な農家の結合、また生活上の課題解決においても、集落の合意形成の機能を無視しえない。集落では様々な機能集団を形成して課題に対応する場合が多いが、この機能集団自体が生産力の発展に伴う農業経営や生活の課題に応じて変化することが重要となっている。そのため集団を統合・再編し、新たな合意を連続的に形成していく集落機構の在り方が重要となってきた。従来の北海道集落の分析では、多くは機能集団の分析として展開されてきたが、これら集団を創出し発展させる基盤としての集落の機構的特性を踏まえて明

らかにしなければならぬ。

また北海道農業は、規模拡大を中心に展開してきたが、八〇年代に入り、土地の流動化の停滞、米作・畑作・酪農にわたる大幅な生産調整、輸入圧という転換期の中で量的拡大は困難となり、土地生産性の向上や作物の品質及び乳質の向上が求められ、そのための肥培管理・飼養管理技術の向上が経営的にも市場条件としても重要な課題となっている。このような技術・知識は、従来個別対応の性格の強い部分であるが、個々の農家に蓄積された技術・知識の発見や導入を集落がどのように媒介し、伝播・交流しているかも農家の生産力と農家間の集団的特質を形成する上で重要となっている。また従来集落内で無意識的に或は潜在的な競争によって形成していた技術も意識的な伝播・交流が重要となっている。これらの細かい肥培・飼養管理技術においては、一般的な技術だけでなく特定地域の自然・土壌条件下で形成される技術の入手が一層重要なのである。これら集落研究における情報の機能と内容は通歴史的になく、時代に求められる現段階の課題を踏まえて捉えなければならぬ。

このような生産・生活に関わる機能集団の発展や、またそれらの情報や技術の公開・交流等を統一した総合的な機能を担い得る集落は、いずれの集落でも可能というわけではなく、集落の運営機構や農家間の関係の在り方に密接不可分に規定されている。

鹿追町と更別村の特徴を簡単に捉えてみると、いずれも十勝の畑作限界地域に属するが、80年代に入って反収・反当たり収入を十勝の中で最も急速に向上させた町村で、かつ離農率が最も低下するが、その中で相対的に鹿追町が反当たり所得の向上で対応しているのに対し、更別村は開発と規模拡大で対応しており、また鹿追町が階

層規模格差が拡大せずに展開したのに対し、更別村の規模格差は大きい。

まず更別村の集落再編は、一集落戸数が少なく、大規模機械化事業にも取り組めないという理由で、農協・役場によって七八年から実施し、八一年に全集落で終了した。この再編成推進委員会の委員は八名で各関係機関から一名ずつ出ているが、各集落代表は組み込まれずに決定された。

機構面の変化では、農事組合長会議を新設し農協との連絡機関を作るが、そのまま自主的に町レベルで形成されていた各作物別の出荷組合を解散させて、農協の部会を創設し、農協・集落の関係が二ルートで運営するようにした。この部会は決定権をもたず理事会の諮問に留め、事実上理事会のみの意見が決定される。すなわち部会は、農協・理事会の意向が農事組合長会議を通じておろされる場合の隠れ蓑となっていた。比較的離農の少ない北更別集落を事例に見ると、農協での作目別部会の審議内容の伝達・協議は行われておらず、また技術交流等も機構的には行い得ない。農協との関係においても、生産の面においても、農家が自主的に関われる側面が集落の機構として弱く、それが集落の活動と規定的な関係となっている。続く八〇年からの鹿追町の集落再編では、農協・町は集落代表二六名を含めた再編審議会に再編方法を一任し、再編審議会では農協・町とは独自の再編方法を提起した。この全町の再編が行われる直前の八〇年に中鹿追集落が自主的な再編成を行っている。中鹿追の再編の契機は、直接的には新農構付帯の集落会館の負担を町・農協に支払わせる交換条件として提起したものが、湿性畑の乾畑化等の農法的な課題と生活共同の困難が背景にあった。再編形態は議

論の中で、作物部門等で分ける機能的なものではなく、地域を範囲とする集落に決め、また全戸の統合でなく、班の機能を重視した。

運営機構で最も重要な要素は①会議の在り方、②役員選出方法と役員の性質、③財政活動である。中鹿追集落の会議は毎月の定例会議とし、まず班ごとに集まり、身近な生産や生活での要望事項や冠婚葬祭等の生活に関する話題が提供され、検討される。班会議での検討課題を経て全体会議に移り、ここでは農協理事や公職者等の報告を受け、また班で出された要望を含めて集落全体の要請や課題を検討する。全体会議後、随時の生産・生活の課題別に、特に生産では作物部門で分かれて生産技術や市場動向や生産様式の突っ込んだ議論をしたり、また機械共同利用者どうしで日常的な運営方法を検討する。このような形態によつて、生産・生活の総ての情報が集落会議で得られるようにした。役員選出では、年令に関係無く三〇年先まで決定した順番制にし、力量なき者の集落長の当番時には、二人の班長に力量のある人を補充し、このような体制の中で全員が地域課題を見渡し、全体を動かす訓練をしている。財政では、区長手当等各役員の個人手当一五万円は全額集落の歳入にして個々人の功績に対して手当は出していない。

このように対等な関係として交流できる運営方式の中で、技術や経営に関する情報の交流やその検討が日常的に行われ、その中で生産の多様な情報を正しく収斂し、個々の農家の技術を平準化させ、集落の集団的な文流による経営の発展が見て取れる。更に集落の交流により、交換耕作の技術的経営的な優位性を認識し、過半数の酪農家と畑作農家が交換耕作にも取り組み、土地の高度利用を始めるようにもなった。

中鹿追では、運営を民主的に変更し、農家間の技術交流や異部門間の結合を果たして行く中で農協・町に対しても集落員の声を提案する等、自治的品格を強めて行くのに対し、北更別では、運営の形態が農協主導の作物別の機能的形態を取る中で地縁的な関係を形成し得ず、技術・情報の交流も集落の機構としては果たし得なかつた。このように同様な集落再編の地域でありながら運営機構の違いの中に、技術・情報の伝達機能の違いを形成し、それが個々の経営の発展と集落の自主的活動の差を規定している。中鹿追では結果として農家が、集落再編は重要で、集団的な技術・情報の交流が重要であつたと認識するに至っている。技館・情報の交流は、機械化段階に到達した現段階での集落の果たすべき一つの在り方であろう。